岩手県立
福岡高校

成績層別指導

成績層別指導を徹底し生徒の力を引き出して全校的に学力を上げる

◎「文武両道」「質実剛健」を校是とする。2005年度に教育改革「ダッシュ70プラン」に着手。08年度には「いわて進学支援ネットワーク事業」に指定され、県内4校と連携して学力向上に取り組む。甲子園出場10回の野球部をはじめ、10年度インターハイ出場の陸上部や弓道部など部活動も活発。

設立
1901（明治34）年

形態
全日制・定時制／普通科／共学

生徒数
1学年約190人

10年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、北海道大、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、秋田大、千葉大、東京学芸大、京都大、釧路公立大、名寄市立大、岩手県立大などに92人が合格。私立大は、盛岡大、東北福祉大、北里大、慶應義塾大、東洋大、法政大など延べ67人が合格。

住所
〒028-6101 岩手県二戸市福岡字上平10

電話
0195-23-3385

Web Site
http://www2.iwate-ed.jp/fuk-h/

変革のステップ

背景
◎学校として統一した指導方針がなく、教師の足並みがそろわなかった。生徒の力を伸ばし切れていないという地域の声もあった
STEP 1

実践
◎公開授業などで授業力を高め、学力に応じたきめ細かな指導を行う。他校との連携により教師・生徒双方の意識を高める
STEP 2

成果
◎学力面では過去最高の進学実績を挙げる。ノウハウを共有・継承しようという教師の意識も向上
STEP 3

県内屈指の伝統校として地域の期待を背負う

2010年3月、岩手県立福岡高校では、国公立大に過去10年で最高となる92人が合格した。70人前後で推移していた過去3年間の実績を20人以上も上回る躍進であった。佐々木龍孝校長は、次のように評価する。

「統一した指導方針の下、先生方が一致団結した結果です」

5年前、同校を取り巻く状況は厳しかった。旧制中学校を前身として100年以上の歴史を持つ伝統校であるだけに、同校に寄せられる地域の期待は大きい。しかし、国公立大合格者は毎年50～60人にとどまり、生徒を伸ばし切れていないのではないかという声が聞かれた。

校内にも課題を抱えていた。学年団の独立性が強く、良い取り組みがあってもなかなか継承されなかった。ノウハウが蓄積されにくいので、進学実績は年ごとにぶれが生じる。組織的に生徒の力を伸ばしていく必要があった。

生徒の人間力育成を目指す「ダッシュ70プラン」

こうした課題を背景として、05年度に策定したのが「ダッシュ70プラン」であった。「よい学校」「よい人生」「よい教師」をキーフレーズ

に、生徒の学力・人間力を高め、一人ひとりの進路実現を目指す改革プランである。具体的には、国公立大合格者数70人を目標に、生徒の学力・進路意識の向上と教師の指導力向上を図る。

柱の一つは、「よい教師」を目指した授業力の向上だ。生徒による授業評価を実施し、教師の方針と生徒の意識とのずれを明らかにして、授業改善に結び付けた。生物担当で教務主任の三戸望先生は、自分の授業を客観的に見られるようになったと話す。

「私は授業でプレゼンテーションソフトを使い、分かりやすく視覚的に伝えるように心掛けていたのですが、生徒からは『板書の方が良い』という声が多く挙がりました。授業評価と同じ項目で自己評価も行うのですが、生徒の評価とギャップのある項目もあり、自分の授業を改めて見直すことが出来ました」

もちろん、無条件に生徒の意見を取り入れるわけではない。国語担当の小野拓先生は次のように話す。

「生徒から『進度が速い』という指摘をよく受けます。ゆっくり進めた方が生徒の評価は上がるかもしれませんが、それで必ずしも生徒の学力が上がるわけではありません。本当に生徒のためになる授業とは何かを考えながら、授業評価を活用したいと思います」

岩手県立福岡高校校長
佐々木龍孝 Sasaki Ryuko
教職歴35年。同校に赴任して1年目。「努力の継続」

岩手県立福岡高校
三戸 望 Mito Nozomi
教職歴26年。同校に赴任して4年目。教務主任。「生徒にとって良いと思われることを優先する」

岩手県立福岡高校
木村 基 Kimura Motoi
教職歴23年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「巧遅は拙速に如かず」

岩手県立福岡高校
小野 拓 Ono Hiraku
教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導課。「信賞必罰」

「授業展開シート」で指導ノウハウを共有

授業公開も積極的に行う。自由に授業を見合う「互見授業」、5月に保護者や地域の人たちに授業を公開する「学校に行こう週間」などである。数学担当で進路指導主事の木村基先生は、互見授業の効果を次のように話す。

「例えば、担当教科の数学が苦手な生徒でも、他教科の授業では生き生きしている様子が見られたりします。生徒を多面的に理解して指導に生かすことが出来るのです」

しかし、業務の合間に他の教師の授業を見る時間を確保することは簡単ではない。また、1回の授業で得られる情報にも限度がある。そこで、すべての教師が「授業展開シート」を作成し、生徒・教師に公表している（P.18図）。授業の進め方、学習上のポイントについて、A4の用紙に記した指導計画である。年度初めにすべての授業で生徒に配付する。

シートは共有サーバーにアップされ、教師は自由に見ることが出来る。他の教師がどのように課題を出しているのか、どのようなテストを課しているのかということは、授業を見ただけでは分からない。実績を上げている教師のシートを参考に、授業を改善する教師も多いという。

「トップ10サク」で成績上位層の学力・意欲を向上

二つめの柱である生徒の学力向上については、授業以外でも学力層に応じたきめ細かい指導を行う。

成績上位層には、1年生から「トップ10サク」を実施する。国数英それぞれにおいて、定期考査や模試の成績による上位20人前後に対して、週1回の添削指導を行う。3教科すべての指導を受ける生徒もいれば、1教科のみという生徒もいる。得意教科の指導を受けて自信を深め、他教科が伸びる生徒も多いという。伸びしろの

大きい1年生の段階から、生徒の可能性を出来るだけ広げることが大切というわけだ。

添削後は、教科ごとに週1回、昼休みに解説も行う。

「単に添削をするだけでなく、生徒が顔をそろえることで、『みんなで頑張ろう』という仲間意識、良い意味での競争意識を芽生えさせようとしています」（木村先生）

「上位層は意図的につくるもの」と考え、成績が下がっても入れ替えはせず、進級時に成績が上がった生徒を加えていく。以前は、生徒の意欲を重視し、希望制としていた学年もあったが、生徒の学力が伴わず、普段の授業がおろそかになることもあった。そこで、07年度の1年生からは成績を基に教師が選抜し、参加する意思を確認した上で決めている。

09年度と10年度には、上位層から更に上位の生徒を選抜する「超トップ10サク」も行った。東京大などの超難関大を目指す生徒に対して、別メニューの添削指導を行うと共に、同窓会から支援を受けて、模試や教材、3年生4月に行う東京大見学、1週間にわたる東京の予備校での夏期講習などの費用を援助した。

図　授業展開シート

平成２２年度　**授業展開シート**

担当者	
科　目	数学Ⅲ・C

【私の授業の進め方】

① 前の時間に学んだ内容の**確認テスト（５分程度）**を度々行います。隣同士で交換して採点し解けなかった人は解答用紙の裏に**１０回解いて**その日のうちに出してもらいます。

② 授業は**「予習プリント」**を用いて行います。あらかじめ指示された問題等を、教科書などを参考にしながら**自分の力で考え解いてきてください。**ただし、予習の段階で分からないことも当然出てくると思いますので、例題や例は授業の中で丁寧に解説します。

③ 「予習プリント」の中の問や練習は、授業の中で実際に解いてもらいます。プリント以外の問題も補充して演習することもあります。

④ この時間に学んだことをまとめ、次の時間に学ぶ内容に言及しながら、予習してくる問題を指示します。

⑤ その日学んだ内容の復習は「日々の演習」（通称「日々演」）で行います。

【学習上のポイント・自分でやるべきこと】

① 予習について（３０分）
解ける人はどんどん先の問題を解いてきてください。自分の予習した内容を授業で確認するのが理想的な学習スタイルです。逆によく理解できなかった人も、どんなことを学ぶのかを一通り目を通しておくだけで、授業の理解は全く違うはずです。

② 復習について（３０分）
その日学んだ内容の復習が効果的にできるように、授業の進度とあわせてプリントを毎日出します。これが**「日々の演習」（通称「日々演」）**です。**毎日配布しますので、家に持ち帰りしっかりと解き、翌朝に登校したら次の日々演の裏の解答で答え合わせをして、提出します。**数学学習係はみんなに声をかけて回収し、昼休み中に教科担任までもってきてください。

③ 「まとめプリント」について
単元が終わったら、その単元の中で基本的な問題や重要な問題を厳選した「まとめプリント」を配布し、授業の中で５時間程度演習していきます。予習する問題と復習する問題に分かれていますので、詳しくは配布したときに説明します。

④ テストについて
まとめプリントを演習後、その単元の小テストを行います。

最後に、数学の学習で心がけてほしいのは、**図をかくこと、具体化すること、うまい解答をまねること**の３つです。これは**「手を動かすこと」**といってもいいでしょう。そうすればいつの間にか**数学の問題が解けるようになり、数学が好きになるはず**です。

がんばれ福高生！！

すべての教師が毎年、最初の授業で生徒に配付する。構成は自由だが、「授業の進め方」「学習上のポイント」は共通項目とした

＊学校資料をそのまま掲載

他校と切磋琢磨しながら地域全体で生徒を育てる

もう一つ、成績上位層を伸ばす上で効果を上げている取り組みは、他校との連携事業である。

同校は、08年度に県教委指定の「いわて進学支援ネットワーク事業」に選定された。学校のネットワークを活用して各校の学力を相乗的に高め、医師や弁護士、研究者・技術者など、将来の岩手県を支え、地域づくりや産業振興を担う人材の育成を目指す事業である。福岡高校は大船渡、釜石、宮古、久慈の各高校と共に「県北・沿岸地域」グループを形成し、共同で進学講演会や難関大対策学習会、学習合宿などを実施している。

「本校には、難関大を狙う生徒がそれほど多くなく、予算も少ないため、学校単独で外部講師を招くのは容易ではありません。また、この地域には塾もなく、外部からの情報もほとんどないため、他校の生徒との学習会や学習合宿による刺激から、生徒により高い志望を目指そうとする意欲を喚起したいと考えました」（木村先生）

連携事業は各校の教師にとっても大きな刺激となっている。他校と合同で研修を行ったり、情報交換したりする中で、他校には負けられないという競争心が芽生え、切磋琢磨しながら地域全体で生徒の学力を高めようという機運が生まれている。10年度入試において同校から京都大合格者が輩出した時には、他校の教師は自分の学校のことのように喜んでくれたという。

朝7時半からの補習で成績下位層も徹底フォロー

10年度入試での躍進の背景には、成績下位層の伸びも大きかった。特にこの学年は、高校入試で長らく行われていなかった推薦入試が復活したこともあり、入学時、学力に困難を抱える

生徒が多かった。

推薦入学者は全体の1割である約20人だが、主に部活動の実績を評価されて合格しており、基礎学力が未定着で、一般入試では高校合格は難しかったと思われる生徒もいた。そこで、定期考査ごとに下位層に補習を行い、それでも学力が定着しない生徒には、11月から3か月間、毎朝7時半から30分間の特別補習を実施。簡単な英単語も書けない生徒に対して、漢字や英単語の書き写し、因数分解やルートの計算問題など、中学段階の課題に繰り返し取り組ませた。

書いては忘れ、忘れては書きの繰り返しであったが、教師は持ち回りで毎日、粘り強く指導を続けた。当初は、3か月もの長期補習に生徒は耐えられないのではないかという懸念もあった。ところが、実際には脱落者はおろか遅刻する生徒すらいなかった。生徒は今まで味わったことのない達成感を得た様子で、「初めて90点が取れた」「初めて勉強で先生に手を掛けてもらった」とうれしそうに話していたという。

「成績下位層への徹底した指導は『社会に出た時に必要となる力を高校で付けさせたい』という学校からのメッセージです。この補習以後、下位層の生徒にも私たちの指導や方針が浸透し、学年全体の結束が強くなりました。希望進路は違っても、学年全体で頑張ろうという雰囲気が、生徒にも教師にも生まれたのです。また、補習を受けた生徒の中には、就職志望から大学進学を決意した者もいました。私たちの粘り強い指導が生徒の学ぶ意欲を呼び起こすことが出来たのだと思うと、感無量でした」（小野先生）

英語力の強化を目指す「Eダッシュプラン」も始動

「ダッシュ70プラン」が始まって5年。改革の成果は合格実績だけではない。最も大きく変わったのは、教師の意識だ。かつては学年色が強く、他学年の真似は絶対にしないという教師もいたが、今では自分の学年のことだけを考えるのではなく、学校全体でノウハウを共有・継承していこうという雰囲気がある。

そうした変化は、新しい取り組みに対する教師のフットワークの軽さにもつながっている。

10年度は佐々木校長のリーダーシップの下、英語力の強化を目指す「Eダッシュプラン」を立ち上げた。この地域は、子どもが少なく学校規模が小さいこともあり、中学校の英語は専任の英語担当者以外の教師が指導することもある。地域の恒常的な課題として、英語力向上があったのだ。そこで、同校は英語の授業を、これまでの和訳中心の方法から、アウトプットやコミュニケーションを重視した授業とし、大学入試にも対応できる実践的な英語力を身に付けさせる方針を打ち出した。10年度2学期に、コミュニカティブな授業への切り替えを図ったところ、生徒の反応も上々で、教師も手応えを感じ始めているという。

「『ダッシュ70プラン』で進学実績が上がり、国公立大合格者数70人という目標も大幅に上回ることが出来ました。今後はこの勢いを継承しつつ、英語力の強化に向けた改革を進めていきます。多くの場合、教師にとって授業の方法を根本的に変えるのは、抵抗を感じるものです。しかし、英語科の先生方は『Eダッシュプラン』に積極的に取り組み、授業改革を進めています。『ダッシュ70プラン』を通して、新しいことに挑戦する土壌が出来たことによって、更に大きな飛躍をするための一歩を踏み出させたのだと思います」（佐々木校長）

現在、数学の強化を目指す「Mダッシュプラン」も構想中だ。生徒の変化、目に見える実績の向上が、教師の改革意欲を後押ししている。

「生徒は手を掛ければ掛けただけ大きく成長します。教師は、学力やスポーツでまだ発揮されていない、生徒の潜在能力を引き出す必要があります。教師にとってはやりがいの大きな学校だと思いますし、本校が頑張らなければ地域の発展はありません。眠っている生徒の力を引き出せるよう、これからも不断の指導改善を心掛けていきたいと思います」（三戸先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年4月号指導変革の軌跡「**静岡県立伊東高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）